

奥義は国境を超える

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

北京での講演会

若い頃は好んで遠くの国に出張したのだが、ここ数年、遠出は控えている。昨年(二〇一九年)の海外出張先は高雄と北京の二都市。ただ、北京には三度訪れた。内二度は同じ目的。近年中国の建築生産において国家的な課題になっている工業化に関する講演が主な目的だった。

一度目は中国の政府系機関の専門家だけを対象にした、ごく小規模なものだったが、二度目は日中双方の政府系機関と業界団体が主催した大規模なもので、日本側からも、私だけでなく産官学それぞれ

の立場の方々が壇上に立った。後で聞いた話だが、中国語で「中日装配式建築技術交流大会」と名付けられたその講演会には、千人を超える聴講者が出席し、ネット上で配信された動画は二万人以上もの人が視聴したという。少なくとも私自身、このこれまでの講演会では経験したことのない大人数であった。

「工業化」という概念

「装配式建築」は日本の建築界に馴染みのある表現で言えば、「工業化建築」、つまり工場生産された部品を現場で組み立てて建築をつくる方式のことである。

建設現場での人手不足や技能者

の高齢化の問題は、日本に限ったことではない。中国でもこの問題は深刻化しており、賃金は高騰しているようだし、「現場で三〇代や四〇代の若い人を見かけることは少なくなった」という建設業者の寂し気な声も聞いた。だから、現場打ちの鉄筋コンクリートを工場で作されたプレキャスト・コンクリート部材に置き換えてみたり、内装をパネル化してみたり、設備を空間ユニット化してみたりという類の工業化建築手法の効果的な適用を促進したく、この分野で一日の長のある日本の専門家の話を聞きたいということになる。

けれども、建築技術とそれを用

いる生産組織のあり方には少なからず地域性があり、個別の技術に関する話になると、日本の経験をそのままの形で中国に適用できる訳でもないし、仮に適用できたとしても日本で実現できた効果を中国でも実現できるとは限らない。そこで、今回の私の講演では、最初に「工業化」という概念をどのように定義すべきかという、いわば技術の各論が迷い道に入ってしまった時に、よすがとするべき基本的な考え方を伝えるのが最善だと考えた。

初心忘るるべからず

私自身も長らく忘れていたのだが、まだ駆け出しの研究者だった頃に、物事の判断基準を求めて、様々な概念の定義を国の内外を問わず勉強していたことがある。その中で私が最も大きな影響を受けたのが、故江口禎先生(当時武蔵工業大学教授)による「建築生産の工業化」という概念の定義である。それは私が想像できる範囲を超えて完璧なものであった。この定義と出会って以



2019年11月北京で開催された「中日装配式建築技術交流大会」の熱気溢れる会場。最前列右端の白髪男が筆者。

来、そのような概念定義を書ける学者になることが私の目標になった。

今回の北京での講演では、この取って置き江口禎先生による概念定義を紹介することが最も重要だと直感した。少々長くなるが、その定義を以下に引用し掲載してきた。

「建築生産において、工業的に進んだ技術の開発と適用を促進するとともに、技術の合理性が有効に発揮

されるよう、建築関係者社会の仕組みを変革、整備すること。その目指すところは、次の三つの側面を示し得るような一つの動的状態である。

第一に、発注者やユーザーにとって、建築がこれまでよりも入手しやすくなる状態。これは工事価格の低減や工期短縮のほかに、現物を事前に把握しやすいこと、品質が保証されていることなど、ユーザーの不安感の除去を含む。第二に、建築

生産者側にとって、不安定な労働環境や前近代的組織構造を脱し、高度な生産性が企業利潤の改善と結びついた形で実現する状態。第三に、もっと広い社会的観点からみて、建築生産が適正または主導的な波及効果を生みつつ、国土・資源・都市・国民生活とバランスした良質な国富(建設ストック)を蓄積しつつある状態である。」「(『建築生産事典』、『施工』一九七八年一月号、彰国社) 何度引用してもぞくぞくするような力を持つ概念定義である。

中国は日本が様々な概念を学んできた国だ。概念定義の話にはきつと多くの人が理解を示してくれ、ものと思っていたが、講演後の人々の反応から、私の期待はそう外れてはいなかったとの印象を受けた。私にとっての学問の奥義は一つ国境を超えた。

今回、私自身も初心に帰り四〇年前の江口先生の概念定義を読み直した訳だが、そこに書かれた「目指すべき「動的状態」は、今の日本においても、変わらず十分な意味を持つている。